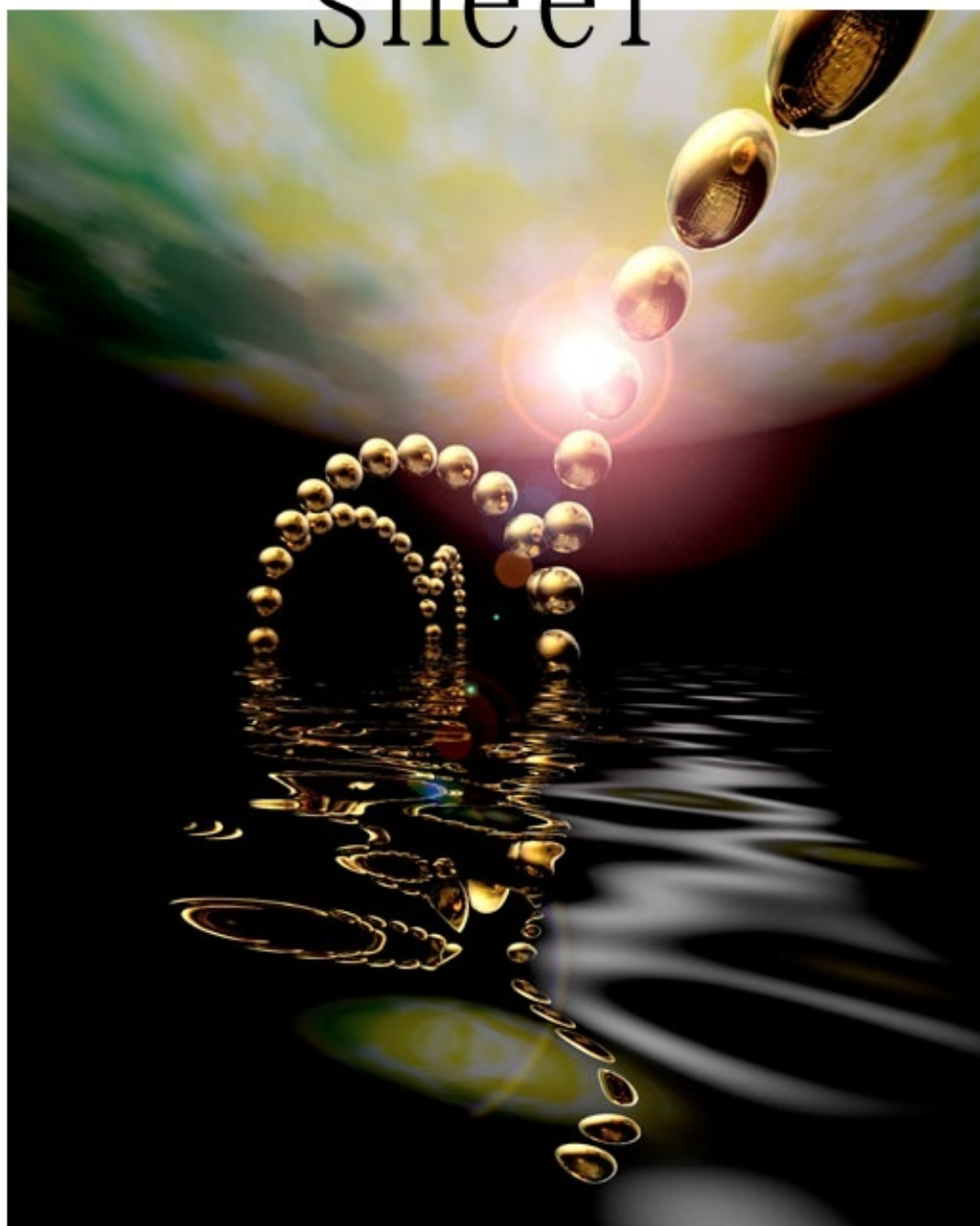


Children's sneer



片桐 繼

しくしくしく.....

それは会社の帰り、いつもの公園の中の道を通っていた時だった。今日は朝から会議詰め、資料のレビューまで入ってしまって、てんてこ舞い。そんな疲れきった、少しぼうつとした頭にやけに強く響いてくる子供の泣き声。僕は足を止め、静まり返った闇に目を凝らす。

ひっく.....くすん

ピクリともしないオブジェ、水の止まった噴水。その向こうの街灯のスポットライトに浮かぶ花壇の影。低い茂みのベンチに、確かにうづくまる人がいる。年の頃なら十を越えたばかりらしい、女の子。

「どうしたの？」

声の主に話し掛けながら、近づいてみた。相手はピタリと声を止め、顔を上げたように見える。

「お父さんに叱られたの」

抑揚の無い高い声。一歩進むたび、少しずつ形を見せる彼女はじっとこちらを見ていた。

「こんなに夜遅いと、おうちの人が心配してるよ」

女の子は脅える様子もなく、ベンチにいた。意味ありげに僕の言葉を否定して頭を振ると、肩の所で切り揃ったシャギーの黒髪がサラサラとゆれる。深く腰掛けているらしく、地面に届かない細く白いソックスの足。膝くらいまでの赤いスカートに何かロゴが入っている白いトレーナー。

「何を叱られたの？」

誰が見ても、この子を可愛い、と言うだろう。一人ぼっち、夜の公園にいるには危険すぎる。

「.....言わない」

素直じゃないな。ちょっとカチンときたけれど、相手は子供、そこは我慢する。そんな僕を見ないまま、少女の視線は遠く、無規則な動きの自分のつま先にある。僕はまた一歩近づいて、

「お父さん、心配してるよ、おうちに帰りなよ。こんなに遅くまで外にいるなんて.....」

ちょっと説教めいた言い方になったかも知れない。彼女はちょっとだけ肩を震わせて飛び降りると、

「やだ！」

あの動かない噴水へと走っていく。僕は思わず後を追う

「おい！」

確かに子供は真っ直ぐに噴水に走る。まるでその浅い池に入水しようとしているかのように、躊躇わない。暗いからなのか？それともふざけているのか？どちらにしても、あのままではレンガにぶつかる。そして、噴水の池は見た目よりもずっと危ない。浅いからといって侮ってはいけない。

危ない！

追いついた、と思うその噴水のレンガのすぐ手前、その瞬間、

彼女は立ち止まり、

そこに置いてあった何かを手にとって、

振り向いて、

無邪気に微笑んで、

こっちをみて

「さ、もう大丈夫よ」

犯人の返り血に染まり、その死体を目の前にして少女はそのまま呆然としていた。余程怖い目にあっただろう。この所、こういう幼い少女をターゲットにした凶悪な性犯罪が増えていて警戒を強めたばかりなのに、と婦人警官は呆れた溜息で今は人型だけが残る白線を見る。

「怖かったね。可哀相に……」

公園には彼女の証言どおり、少女を追いかけた靴跡がはっきりと残っていた。犯行時刻に「やだ！」という子供の声を聞いた人もいた。全ての真実は明らかだろう。父親に叱られて思わず家を飛び出し、公園で泣いていた彼女を狙った変質者は逆に彼女の抵抗にあい、彼女が夢中で拾ったさび付いていた傘の先に貫かれ、ある意味最も情けない死に方をしたのだ。

「まったく、どうしようもない大人が増えてるんだから。 ロリコンって最低よね」

良い警鐘になるわ、と嘲笑。

「君！その子を頼むよ！」

上司が遠くから声をかけ、彼女は小さな敬礼をしてから

「さ、行きましょう」

優しい言葉。

「こんな可愛い子を恐ろしい目にあわせようなんてヤツは、これくらい惨めな最後が似合ってるわ。傘が落ちてて良かった……。頑張ったね、偉かったね。……でも、一人じゃ危ないよ、それはいけないことだよ、これからは、ダメだよ」

上司に聞こえないように、でも思わず零さずにはいられなかった言葉。

「着いたら、お風呂に入って、お姉さんと一緒にいようね。お父さんとお母さんも、すぐ来てくれるからね。」

小さな肩を抱き、警官は優しく彼女を護る。

「……うん」

やっと一言、少女は発して、

(傘が落ちてた？ ありえないって。ばーか。)

ちらと視線が地面にかたどられた人型をなぞり、幼いはずの唇が嘲笑っていた。